

「今、求められる GIFT は何か」

(2025年5月ツアーレポート)

1. 渡航のきっかけ

今年度、私はYOU&MEのグッズ作成や教員研修の担当をさせていただくことになりました。けれども、10年前のスタディツアーハイブリッドに参加して以来、YOU&MEの様子は報告会などで聞いてきましたが、さすがに詳しくは分かりません。そこで、現地の様子を知ることから始めたいと考えました。YOU&MEの子どもたちは、一体、どんな学習をしているのだろう。そして、現地校の先生や地域のことも知りたい。そう考えていたところに、代表理事の玉木さんから一緒に渡航するお誘いを受けたのです。

「あれから10年たった現地校は一体どうなっているのだろう。ようし、行って来よう！」

2. YOU&MEの実態（1）ヘルル先生とシュモン先生にインタビュー

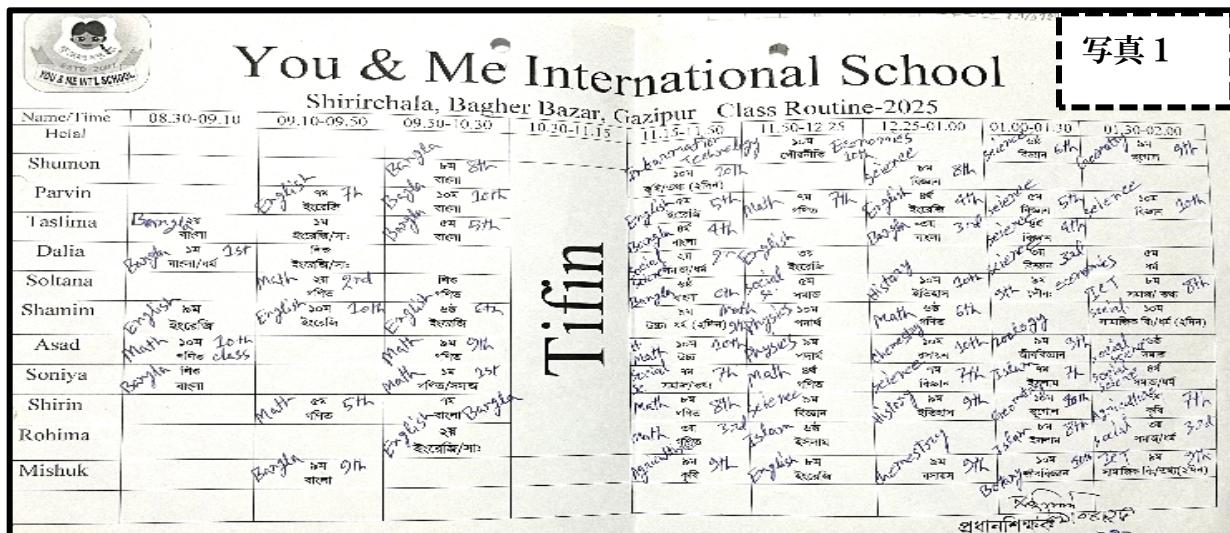


写真1は、現地の先生の指導計画表です。30～40分授業が1日に8コマあります。そのうち、先生は1日に6コマから7コマの授業をしていることが分かりました。これは、週5日で計算すると、なんと30～35時間（コマ）も授業をしていることになります。日本的小学校教員の授業数は20～26時間程度、高校の教員の授業数は10数時間といいます（地域によって違いはあるかもしれません）。いかに授業時数が多いかが分かります。

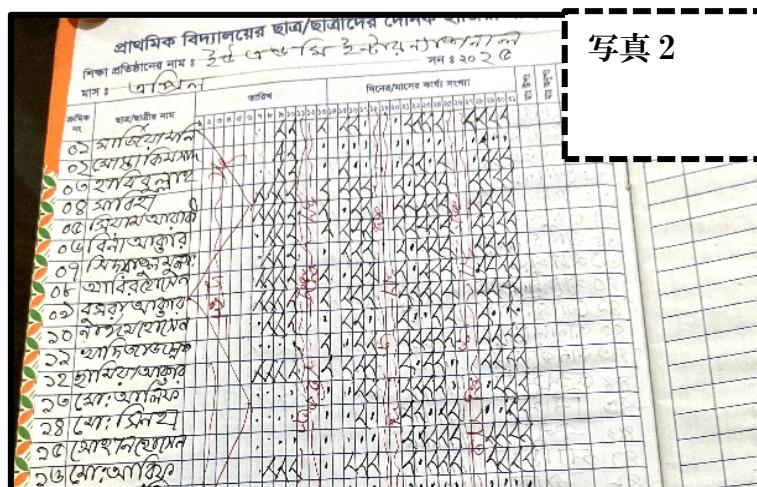


写真2は、児童生徒の出席簿（3年生）です。90%くらいの子が出席しています。想像以上に高い出席率でした（学年によって差があるかもしれません）。欠席理由は、病欠の他、両親共働きで子どもを学校へ行かせることができないことによるものが多いそうです。また、YOUNG & MEのヘラル先生やシュモン

先生によると、休みが続くと先生たちは家庭訪問などを行い、できるだけ学校へ通うように地道に働きかけているそうです。日々の授業を行うだけでも大変なのに、素晴らしい心掛けです。

3. Y O U & M E の実態（2）全教員参加の教育ミーティングにて

今回、私は教員研修の担当として参加しています。とはいっても、上からものをいうつもりはありません。だって、Y O U & M E の主役はあくまで子どもたちであり、彼らをそばで指導しているのは現地の教員だから。彼らをリスペクトしている意思表示を表したい。そう考えた私は、「日本の学校教育の様子を伝えながら自己紹介をする」という方法をとりました。そしてその後に、現地の先生方から感想をいただきました。その中で、Y O U & M E の子どもたちの長所（強み）や短所（弱み）、学校や地域の強みや弱みを話してもらいました。そこで活躍したのが、今回のツアーと一緒に渡航した石崎さんのA Iボイスレコーダー！この機械で録音すると、英語もベンガル語も、日本語訳してくれるという優れもの。現地では玉木さんの通訳を介してディスカッションを行い、ホテルに戻ってからは、録音したデータをもとにさらに会話の内容を分析しました。その分析結果と、このツアーの中で知ったその他の情報を合わせてまとめたのが表1です。

表1：Y O U & M E INTERNATIONAL SCHOOL の学校分析（2025.5 現在）

	子ども	教員・学校	家庭・地域
強み	どの先生の指示もよく聞く。 学校を楽しみにしている。 学校で学べることが楽しい。 学力共通テストの成績がよい。	熱意がある。 生徒理解に積極的。 複数体制による生徒支援。 信念がある。 全校生徒に食料支援の実施（行事ごと）。	家庭中心の教育。
弱み	家庭の事情で休みがちな児童がいる。 家計を助けながら通っている子がいる。 十分な食事をとっていない子がいる。	設備が不十分。 幼児クラスのあそび場（知育的なもの）がない。 待遇面（教員不足を含む）。 指導への不安（どうすればよいか分からないことがある。）	学費の未払いが多い。 毎日通学させられない家庭がある（経済的理由）。

今回の分析結果から、Y O U & M E を語るうえでとりわけ注目すべき点は、「教員の強い信念と子どもへの深い理解に基づいた、温かく一貫した生徒支援の姿勢」です。

上記に書きました家庭訪問の他にも、放課後には家庭教師となって個別指導に当たっていることもあるそうです。その成果でしょうか、バングラデシュ全国共通テストにおいて、Y O U & M E はよい成績を修めているのだそうです。また、教員は子ども一人一人のことをよく把握

していて、複数体制による生徒のサポートに積極的である点が強みであるといえます。

教育ミーティングでは、スルタナ先生、ハルビン先生、ソニア先生が代表して話してくれました。「日本の子ども達のように毎日給食が与えられることはない。本校では、行事ごと（1～2か月に1回）程度の食糧支援しかできない。けれども子どもたちはそれをすごく喜んでいて学校に来ることを楽しみにしている。」「私たちは協力しあって子どもたちのケアに取り組んでいる。でも、ときにはどうしたらいいか悩むこともある。」。彼女たちは今の思いを切実に語ってくれました。（なお、日本は給食を無料提供していると勘違いした可能性がある。）

私は、「日本の子どもたちはなんでも手に入る。」という話に対し、「しかし、日本の子どもたちは幸せを感じているかは分からない。」と伝えました。「少なくともYOU&MEの子どもたちは、日本の子どもたち以上にキラキラとした笑顔をしているよ。」…そう伝えると、先生たちから拍手が起こりました。彼らは、「自分たちの指導は本当に正しいのか」と悩みながら日々取り組んでいた。しかし、子どもたちの笑顔は日本人以上なのだと分かり、「間違ってなかったんだ。」と感じた。その安堵感から起こった拍手だったのではないかと思いました。

4. 今、求められる“GIFT”

10年前に比べ、子どもたちはとてもフレンドリーになっていました。特徴的なのは、写真を撮られる時です。10年前の子どもたちは、カメラと“外国人”が珍しいらしく、写真を撮られることは嬉しい様子でしたが、直立不動になってしまふ子が大半でした。それから月日が流れ、バングラデシュでも携帯電話は大変身近なものになっていました。そのせいか、カメラを向けても表情がとても自然です。

もう一つ、気づいたことがあります。それは、自ら私たちに近づいてくる子が増えていることです。きっと、この間、何度も現地に足を運んできた玉木さんや石崎さんが、忙しい合間にも積極的に親睦を深めていたのでしょう。おかげで、子どもたちにとって、私たちは“外国人”ではなくなってきているのです。

一方で、経済的理由で苦しんでいる家庭も多く見られます。また、日々悩みながら奮闘する教員の姿があります。校舎は立て替えられましたが、学習環境における設備面に課題がいつも見られました。そこに、日本に住む私たちができる“GIFT=支援”的答えが隠されているように思いました。

2007年に誕生したYOU&MEは、目まぐるしく変わる時代の変化とともに、今も大きく成長し続けています。今回のツアーに参加したこと、私は、生徒と真摯に向き合うYOU&MEの教員の姿と実態が見えてきました。日本に住む私たちがYOU&MEにできることは何かを考えたとき、彼らをリスペクトした“GIFT”を行うことが大切だと思いました。

そう、現地の仲間と奮闘する玉木さんや石崎さんのように、YOU&MEを応援する一人ひとりが、同じ思いで“GIFT”する家族であり続けることが求められていると感じました。